二〇二四年十二月十日

今日はシンジョーが楽しみにしていた社会科見学だ。毎年六年生は、国会議事堂に行っているらしいが、今年は違う。五十周年ということで、子供の投票で決めたのだ。四月に行った「社会科見学で行きたいところ」一位になったは、ディズニーランドだった。まさか実現するとは思ってなかったが、六年担任や校長がいろいろと交渉して、行けることになった。

これは社会科見学なので、アトラクションには乗らない。キャストの働きぶりやゲストへのサービスの仕組みなどを勉強するために活動する。あくまでも勉強である。

といっても、場所はディズニーランド。アトラクションには乗れないが、買い物や食事はできる。それだけでも楽しみだ。国会に行っていた先輩たちには申し訳ないが、今年が五十周年でよかった。学校を出発するときに、校長先生が「これは、六年生が五十周年行事を盛り上げてくれたお返し、扇小学校からのプレゼントです」と言ってくれた。

今日を迎えるために、シンジョーたちの学年はディズニーランドで働いている人のことをいろいろと調べてきた。キャストをしていたことがある人に来てもらって、話も聞いた。ワクワクするような勉強だった。

どのクラスも行きのバスの中はディズニーソング一色だった。聞いたことのない曲もあったが、つい口ずさんでしまうくらい、みんなが盛り上がった。

ディズニーランド内での活動は、三時間。この時間内に食事をして、買い物もする。もちろんキャストの働きぶりについて記録して、まとめなければならない。それが活動のねらいなのだ。

事前に行われた学年説明会で、お小遣いについての説明があった。ルールは二つだった。

・一人三千円

・何を買ってもよい

説明会ではいろんな質問が出た。

「三千円でトレーナーを買ってもいいですか」

「立ち食いしてもいいですか」

「二つのレストランに入ってもいいですか」

「ビールを飲んでもいいですか」

楽しい雰囲気の説明会だったので、少しふざ

けたような質問もあった。この質問に対する先生たちの答えはすべて「OK」だった。ただし、ビールについての質問には、「君たちにビールを売ってくれると思いますか」と逆に質問され、笑われた。

入館(にゅうかん)してからはグループ活動となる。修学旅行や林間学校の時とは違い、時計係の他に携帯係(けいたいかかり)もある。シンジョーは、その携帯係になってしまい、自分のスマホを持ってきた。何かあったときに、先生に電話することがシンジョーの役目(やくめ)である。

シンジョーたちのグループは、計画通りにすぐにポップコーンを買(じっぷん)いに行った。ワゴンでは十分並んだ。友達と食べるポップコーンは格別(かくべつ)だった。テンションも上がり、食べながらの会話も弾(はず)んだ。食べながらも、キャストの仕事ぶりを学ぶことは忘(わす)れていなかった。ポップコーンを売っていた人の笑顔(あんない)や、この場所を案内してくれた人の優(やさ)しい言葉、いきいきと清掃(せいそう)している人の動きなど、シンジョーは、感じることが多かった。何よりも、このおいしいポップコーンを作っている人のことも思い浮(う)かべてしまった。

ポップコーンを食べ終わると、シンジョーたちはお土産を買いに行った。シンジョーは、家族のためにクッキーを買った。お昼のお金をとっておきたいので、一番安い、数の少ない箱を買った。ここでもシンジョーはキャストの笑顔と明るい声を感じた。グループの他の子が並んでいる間、外に出てタブレットに気づいたことを書き込んでおいた。

　ショップを出た時、すでに時刻は十二時近かった。シンジョーたちは、昼食は一時半と決めていた。十二時だと混む。二時だと、集合時刻が気になる。一時半にハングリーベアに行ってカレーを食べる。それが、シンジョーたちのグループで決めたことだった。

　シンジョーはここに来て、驚いたことがあった。小学生が意外と多い。社会科見学なのか修学旅行なのかは分からないが、扇小以外の小学生にも、数校出会った。

　そして、驚いたことのもう一つは、ほとんどゴミが落ちていないことだ。掃除をしているキャストがいることは知っていたが、本当にきれいだ。「きれいな教室でこそ、しっかり学ぶことができる」と校長先生が講話朝会で話していたことを思い出した。人々に夢を

与え、ゲストにハピネスを与える場所、きれいだからこそ、今自分たちもウキウキ、ワクワクしているのだろうと考えた。

シンジョーは自分の役目を思い出し、スマホを手にした。その瞬間、愕然としてしまった。画面が真っ暗だったのだ。しっかり充電してきたはずだったが、電源がなくなっている。グループの子にこのことを話すと、「どこかで充電しよう」「どこかに充電できる場所があるはずだ」ということになった。

シンジョーは責任を感じ、掃除をしているキャストを見つけて、声をかけた。自分がグループの携帯係としてスマホを持ってきたこと。そのスマホの充電が切れてしまったこと。どこかで充電をしないと、何かあったときに困ってしまうことを、必死に話した。

すると、そのキャストは笑顔で、温かい言葉で言ってくれた。

「たいへんだったね。じゃあ、私が充電してくるから、その間、あそこのトイレにでも行っておいで。十分後、ここに来てくれたら、このスマホを渡すから。」

シンジョーたちは案内されたトイレに行った。そういえば、入館してから一度もトイレ

には行ってなかった。トイレを済ませ、さっきの場所にみんなで行った。まだキャストはいなかった。時計係の子は「あと二分かな」と少し不安そうに言った。

その二分後、笑顔でさきほどのキャストが走ってきた。右手にはシンジョーのスマホを持っている。

「お待たせしました。はい、スマホ。ごめんね、100%にはならなかったけど、これなら、あと三時間は使えるはずだよね。」

シンジョーは、お礼を言って、一緒に写真を撮って下さいとお願いした。キャストはすぐに、「いいよ」と言ってくれた。それどころか、近くにいる人にカメラマンをお願いしてくれた。シンジョーにとっては、この写真がこの日のベストショットになった。シンジョーたちは、このキャストの温かさを心から感じた。心が暖かくなるというのは、こういうことなのだと実感した。

その後シンジョーたちは、予定通りにレストランに入り、それぞれが、おめあてのカレーを食べた。おいしかった。そして楽しかった。食事を楽しんでいると、キャストの一人が、「お口に合いますか。記念写真を撮りま

しようか」と話しかけてくれた。

さらに食べ終わると、別のキャストが来てくれて「満足いただけましたか」と声をかけてくれた。「おいしかったです」と声をそろえて言うと、どうして知っていたのか分からないが、「忘れ物をしないで下さい。集合時刻に遅れないように、気をつけて下さいね」と言ってくれた。ここでもシンジョーは、心が暖かくなる一言を学んだ気がした。

シンジョーたちは食べ終えると、キャストの動きに注目しながら少し歩いた。そして、集合時刻が近づいてきたので、集合場所に向かった。その場所に近づくと、見慣れた友達や先生が見てきた。「間に合ってよかったね」とグループの一人が言った。シンジョーは「結局使わなかったな」とつぶやいて、持ってきたスマホを見た。画面の右上を見ると、「50%」という残りの電源が表示されていた。

集合場所に着くと、シンジョーはうれしくて、鼻歌を口ずさんだ。それはディズニーソングではなかった。

肩組んで仲良く勉強しよう

大好きな大好きなこの学校で